

耐えるたびに見えてくる

教育情報いわて社

編集長 佐瀬 壽朗

バスの中の母と園児

バスの車内はいつもより少し混んでいた。あるバス停からお母さんと一緒に幼稚園の男の子が乗車してきた。座っている私の側に立ったので「ここに座って」と話しかけると、お母さんは「ありがたいございます。この子とは座れないときは我慢するように約束していますから」と穏やかに語られ、確かめるように子どもの顔を見つめた。その子もお母さんの顔を見てにっこり。「そうか、えらいね」と誉めると、座席の把手をしっかりと握って10分ほど立ち続けていた。

下車するとき、お母さんとその子は「ありがとうございまして」と運転手さんに一言残して降りて行った。歩き始めてからのお母さんは「偉かったね、約束し

どもな、人様の家の物を盗るのは泥棒だ。悪ごとをやっちゃだめだ。神様は見てる。今夜はお月さんも見る。我慢せ」とたしなめられた。

しばらくして、母は持ってきたキユウリを風呂敷から取り出した。月明かりの田の畦に座って、母と口にした生キユウリの味噌味は忘れられない。

ホームレス中学生

ベストセラー、田村裕さんの著書「ホームレス中学生」。十歳でお母さんをガンで亡くし、十三歳のとき

佐瀬 壽朗氏
プロフィール

●昭和36年山形村立小国小学校教諭●昭和39年盛岡市立仁王小学校教諭●昭和57年県立教育センター研究員●昭和60年盛岡市立仁王小学校教諭●昭和63年宮古市立花輪小学校長、以後、盛岡市立太田小学校長、盛岡市立上田小学校長、盛岡市立桜城小学校長を経て平成11年定年退職●同年盛岡市立中央公民館太田分館長●平成16年より教育情報いわて社編集長

お父さんもガンに侵され、そのため会社を解職。精根つきたお父さんはある日、突然「一家解散」を宣言し行方不明に。住んでいた家は人手に渡り、田村さんは兄弟とも離れ独り身に。公園の遊具の中で辛い暮らし。空腹を満たすために草や段ボールまで食べてみる。そのときの心境である。

「こんなに腹が減っているのだから、一個ぐらいパンを盗ったってバチがあたらないだろうと、いけない考えが浮かんできた。罪を犯すか犯さないかで迷っていた。腹の虫と理性が闘っていた。そのとき、お母さんの顔が浮かんだ。もし、お母さんが見ている、そんなことをしようとしていると知ったら、どんな顔をすればだろうか。」

田村さんの理性が勝った。「あの日、もしパンを盗んでいたら、僕の人生はどうなっていたかを考えるとぞっとする。お母さんが止めてくれた。守ってくれた。見ていてくれた。」と自分をそのように育ててくれたお母さんを誇り、思慕するのである。

耐えるたびに

今は亡き作家、藤沢周平さんは、色紙を請われると「耐えるたびに少しづつ人生が見えて来る」と書かれたそうである。

バスの中で10分ばかり立ち続けたあの子には、下車後、何が見えて来たろうか。母との約束を果たした誇り、大人のように耐えた成長の自覚、母の人中での振る舞いであつたかも知れない。

私にとつての六十年前のあの夜。母は日頃のように「人の道」を繰り返す母であつた。「やっぱりな」とほっとした。もし、食べ合つたなら、それ以後、母を観る目が変わつただろう。

田村さんは、お母さんから「認められ誉められ期待されたことが、耐える磁針となつた」と述べている。

お母さんと逆境を支えてくれた心温かい方々へ報いるため、個性を活かせる芸能界を目指したのであつた。

子ども時代、だれもが様々な場で様々な「耐える」体験をしてきている。「耐える」たびに、それまでより少し成長し脱皮したもう一人の自分の存在に気づいてきている。その積み重ねが人生であることにも。

子どもが「耐える」のは、その子の意志力ではあるが、何と言つても現にその子を取り組んでいることの価値を語り、心底から誉めて認めて支えてくれる親（大人）が側にいるからである。大人とて子どもと全く同様なのである。

私の母は晩年、病が重くなり介護施設にお世話になつた。認知症が徐々に進んできていた。

会いに行くたびに「大きくなつたなあ。悪いことするなよ。人を騙したり人の物を盗つてはならねぞ。手が後ろに回るぞ。欲しいものがあつたら母ちゃんが買ってやるがら」と諭された。いつも素直に耐えて聞いた。母にとつては、私はいつまでも子どもであつた。

時間・空間・立場・病状を超越し、「耐える」気力が弱り、自分の世界に浸って満足している母を羨ましくさえ思つたこともあつた。

その母の姿は、近い将来の自分の姿でもあることが見えてくるのだつた。

PTAいわて